1　さくらの手袋と謎の老人

1

ひたすら箱を開ける。うず高く積まれた段ボール箱の一角を切り崩して、梱包品を取り出し、しかるべき場所に収納する。その間にも、四歳になったばかりのさくらが、物珍しいのか新しい家電製品やガス器具の取扱説明書をまき散らそうとするので、力づくで阻止する。向こうでは、夫の陽介が「テレビが映らない」と叫んでいる。「そんなことは後からにして」と言い伏せたところで、今度は唐突にインターフォンのチャイムが鳴る。さっきもこの手の客が来た。また新聞勧誘員だ。すかさず「もう決めていますから」と追い返す。高原恵は、自分の声がだんだんとヒステリックになりつつあるのを感じた。

そんな引っ越し当日を、恵はもう何週間も前のことのように思い出す。

実際にはまだ一昨日、一月五日のことだ。ここは稲風市郊外にある住宅団地「ちがや台」である。ほとんど同じ大きさの区画で並ぶ土地の一角に、ちょっと背伸びして建てた、新築の住まいだ。周辺の家々の大抵の玄関には、まだ正月飾りが付けられていた。

引っ越し当日の夜、友人の由香から電話がかかってきて、その第一声は、

「おめでとう」

だった。

「ありがとう。でも、今日が引っ越しの日だって話していたっけ？」

恵がそう返すと、一瞬の間があって、由香はこう告げた。

「……あ、恵って今日引っ越しだったんだ。おめでとう！　前に言ってた新居だよね。でも、さっきは『あけおめ』の『おめでとう』だよ」

恵は、自分の顔が赤くなるのがわかった。とにかく頭が引っ越しでいっぱいなのだ。

転勤や異動に伴う引っ越しではない。だから、世の中が慌ただしい正月を避け、少し後にずらしても良かったのかもしれない。しかし、年末に家が竣工したというタイミングや、長男の大樹の小学校の転校が学期途中ではないほうがよいとの考えから、陽介と相談し、この時期にした。もともと、ちがや台から車で三〇分ほどの稲風市中心部に暮らしていたのだから、大ごとにはならないだろうという甘い見込みもあった。それがこの様だ。

もちろん、ほかの時期だろうが引っ越しというのは非日常であり、混乱である。そのことは十分理解しているのだが、周囲の家庭が落ち着いた年始を迎えていると考えると、恵は早く日常に戻らなければと焦ってしまうのだった。

引っ越し翌日だというのに、昨日は陽介の初出勤だった。玄関から送り出すと、荷物が一つ片付いたようになんだかすっきりした。なにしろ、「テレビが映らない」「シャツはどこへ仕舞った」などとわめく図体の大きいのが、少なくとも昼の間はいなくなったのだ。

そして今日は大樹の学校の始業式だった。たった今、新しく通うことになる茅南（ちがやみなみ）小学校へ送り届け、新しい担任に書類を渡し、挨拶を済ませてきたところだ。また一つ「荷物」が片付いた室内を見渡すと、実際に段ボールの山脈もなだらかに収斂しつつある。やっと引っ越しを振り返る余裕も出てきた。

（我ながら、よく頑張った）

恵は自分を褒めた。真新しいキッチンに行くと、褒美に好きなコーヒーを淹れることにした。お湯の沸く小さな音がかすかに部屋に響くのを聞きながら、久しぶりに穏やかに時間が流れるのを感じた。そして、こころなしか気分が高揚してきた。

（ここから、新しい生活を始めるんだ。大樹もさくらも、ここで育てるんだ）

さくらは、やっと障害物が取り去られ、自由に歩けるようになった家の中をストトトト、ストトトトと歩き回り、未踏の地がないかを探している。何となく所在なさげに見えるのは、慌ただしくて構ってやれなかったせいもあるが、引っ越す前は幼稚園で過ごしていた時間帯ということもあるだろう。

転居によって通っていた園はかなり遠くなってしまう。新居近くの幼稚園に転園させようと考え、引っ越し前に問い合わせたのが、何年も前のことのように思える。見学にも行き、設備もよく先生も熱心であることがわかったのだが、残念なことに、空きがないと言われてしまった。近所には保育園もあるのだが、恵は今、働いていないので、入れられない。「年度末になると、転出で翌年分の空きが出るかもしれませんから」とのことで、しばらくは家で過ごさせることにしたのだ。

淹れたてのコーヒーをリビングのサイドテーブルに運んだところで、静寂を破るようにインターフォンのチャイムが鳴った。受話器を取ると、

「ええと、町内……」

とかすれた声がする。しつこい新聞勧誘だ。

「もう、取る新聞は決め……」

「あいや、ええと、町内会長の刈羽なんですが」

声の主は、恵の言葉を遮って名乗った。

慌てふためいて玄関めがけて走ったので、恵の足は、途中に置いてあった重量のある大きな箱に激突した。その拍子に、大きな音を立てて、中に入っていた大量のカセットテープがぶちまけられた。全部、陽介のものだ。「これは俺が片付けるから」と言ったので、手を付けずにいたのだが、結局そのまま。

地理の目

野菜と地域

野菜はどこからやってきた？

私たちは日ごろ、様々な野菜を口にしますよね。「野菜キライ」という人も、まったく野菜に手を付けないということはないでしょう。野菜は私たちにビタミンを供給して健康をもたらしてくれるだけでなく、様々な色や形で食卓を美しく飾ってくれます。

地理学において野菜は主に、農業という産業における生産物として扱われてきました。例えば、ダイコンはどの地方で多く生産されているかといった産地の分布。ニンジンが産地から家庭までどう運ばれるのかといった流通。あるいは、地域ごとに違うジャガイモの育て方の工夫といったような生産様式の地域性。このように野菜を地理学で扱うとき、経済活動やそれに関連した社会システムの枠組みの中で論じられることが多い傾向にあります。

しかし、ここではちょっと違った視点から、「野菜の地理学」を眺めてみましょう。つまり、野菜を一つの文化として捉えてみたいのです。料理が文化であることに、どなたも異論はないでしょう。長い歴史の中で、使う食材や調理法、味付けの違いが地域ごとに生じ、それが定着したものが、日本料理・フランス料理といったものです。そしてフランス料理のシェフが、隠し味に日本の味噌を使うというように、それぞれが各地に伝播し、互いに交流する中で発展してきたのです。野菜も変わりません。それぞれの原産地ごとに、人が意図をもって**栽培化**（ドメスティケーション）し、そして各地に伝播する中で育まれてきたのですから。

では、野菜はどこから来たのでしょうか。現在の日本には様々な野菜が溢れていますが、日本原産の野菜は、ミツバ・ウド・セリ・フキといった、どちらかというマイナーな、ごく一部の種類に過ぎません。**私たちが普段食べる野菜のほとんどは、海外からやってきた**ものです。バビロフという研究者によると、大部分の野菜の原産地は中国、インド～マレー半島、中央アジア、近東、地中海、エチオピア、メキシコ南部～中米、アンデス西麓という八地域に集約されるといいます。これらは、古くから文明が栄えた場所でもあります。このことは、文明の発達とともに、野生の植物の中から食用に適したものが選抜され、栽培化されていったことを示唆しています。ここからも、野菜が文化であることがわかります。

カレーライスを食べるとして、具材の野菜がどこから来たのかを考えてみましょう。タマネギとニンジンは中央アジア。ジャガイモは南米アンデス。野菜カレーにしようということで、ナスを入れたらそれはインド。カボチャなら中南米、キャベツなら地中海。こんな具合で、まるでカレーという会場で野菜たちが国際会議をしているかのようです。この

ように、私たちの食生活は世界各地から旅してきた野菜たちで成り立っているのです。

さて、野菜の栽培化というのは、単に野生のものを畑に植えつけるということではありません。最初はそうだったかもしれませんが、その中で、可食部の大きいもの、おいしく栄養価の高いもの、育てやすいもの、といった具合に、人にとって都合のよい**形質**を持ち合わせた個体が選ばれ、次第に野生種とは違った姿になってゆく過程を言うのです。

例えば、地中海地域には、ヤセイカンランという、荒れ地に育つ貧弱な雑草がありま す。「これはまあ食べられる」と思って栽培する中で、たまたま葉が大きく肉厚になるものが出ると、それを選んで種を採り、次の季節にはそれを植えます。こうしてケールが生まれ、さらに葉が丸まって輸送に便利な形質を持つキャベツ、蕾の集まりが大きくなるカリフラワーやブロッコリーが生まれたのです。つまり**野菜は、野生種の中に柔軟に形質を変化させるだけの遺伝子の多様性があることと、人が意図を持ってそれを操ったことの両方があってはじめて、生まれた**ものなのです。

こうして誕生した野菜は、人の移動によって各地に伝播してゆきます。慣れ親しんだ、おいしく育てやすい野菜は、移動先でも育てて食べたいですものね。移動先で栽培していると、その場所のもとからの住民に「私も栽培したい。種を分けてくれ」と言われ、栽培の仕方を教えることもあったでしょう。また、通りがかった旅人に「故郷に植えたい」と頼まれ、種子を売ることもあったでしょう。このようにして伝播先で定着するだけでなく、さらに別の地域へも広がってゆくことになります。

繰り返される伝播と定着の過程で、野菜は形質を変化させます。原産地と、伝播した先とでは、自然条件が同じとは限りません。伝播先が原産地より寒い地方であれば、持ってきた種子を蒔いても、大部分が凍害で枯死してしまったかもしれません。でも、諦めなければ、わずかに生き残った耐寒性を持つ個体が選抜されて定着したはずです。また、その野菜に様々な色や形、味のバリエーションがあったとして、伝播先の人々が特定の性質を好んだ結果、その形質が固定化されることもあったでしょう。

このように、長い伝播の旅路の中で、野菜は地域ごとの多様性を獲得しながら広がっていったのです。

カボチャとトマトの長い旅路

こうした野菜たちが辿った壮大な旅の具体例として、滝川さんが畑で栽培していたトマトと、クラブを立ち上げるきっかけとなったカボチャについて見てみましょう。

トマトは、もともと南米アンデス山脈の荒れ地に生育する高山植物でした。土地のインディオたちが、その小さな実を摘んで食べていたものと思われます。彼らが中米へ移動する際に種子を携えたようで、この場所で栽培化がはじまったと考えられています。

ちなみに、ナス科の野菜の多くが同様に中南米で生まれています。ジャガイモもアンデ

COLUMN

ちょっと寄り道　お仕着せの領域

多くの小学校では「**通学路**」が決められています。児童が安全に登下校できる道路を学校が選定し（選定の過程で保護者や地域団体と協議する場合もある）、そこを専ら使わせることで、事故や犯罪に遭遇するリスクを管理しているのです。さらに家庭が、その決められた道路から特定のルートを選んで学校に届けることで、学校と家庭の双方が子どもの登下校時のルートを把握できるようにしている例が多いと思われます。

子どもにとってみれば、安全のためだとはいえ、登下校時は大人の決めたルート上しか歩けないという、**行動の自由を奪われた状態**になっているといえます。私には、この通学路について苦い思い出があります。通っていた小学校では、集団登校制をとっていました。まず、地区の集合場所まで決められた道をゆき、近所の小学生全員が集まるのを待って、学校へ出発するのです。ところが家の位置が悪く、集合場所が学校へは遠回りになる場所に設定されていたのです。行きは仕方なくそのルートを行きますが、帰りは個別の下校でしたから、一直線に近道を帰っていました。そのほうがむしろ安全であるからという理由で、家庭公認の行動でした。ところがある日、物陰から私の行動を見張っていた通学団の上級生が現れ、「お前は通学路破りの常習犯だ。先生に言ってやる」と鬼の首を取ったように言ってよこしたのです。私は、「確かに学校が決めたルールとは少し違うかもしれないが、家庭からそうしなさいと言われている。この道でも安全であることは見ればわかる」という意味の言葉をたどたどしく言い返したように思うのですが、どうにも納得してもらえませんでした。

学校にはこんなルールもありました。「学区の外に出るときは、保護者同伴でなくてはならない」。私はこのルールにも苦しめられました。私の家は学区の境界にあり、道を挟んで向こう側は、別の小学校の学区だったからです。当然、日常生活上の行動エリア（**生活圏**）はそちら側にも伸びています。遊びに行く公園。ノートを買いに行く文房具店。一人で行動ができるような学年になると、こっそり、このルールも破っていました。そうでないと不便で仕方ないのです。

このように、**社会的に決められた領域と、個々人の合理的な行動との間には、不合理な溝が生じている**ことがあります。このことは多分に地理学的な問題を含んでいますから、もう少し掘り下げてみましょう。

人は、もともと群れで生活する中で、集団ごとに排他的にその場所を使用する**縄張り**を持っていました。定住するようになると、縄張りは固定されてムラのような領域となりました。社会の発達とともに、小さな領域は、統一されたルールの下で複数が束ねられるようになります。その領域の管理者は、領域内の人民を統治し、また、安全を維持するた

め、ほかの領域との間の不規則な出入りを制限するようになります。これが、現在の国境管理の原型と言えるでしょう。また、領域が大きくなれば、全体を一挙に掌握するのは困難ですから、その領域の中に入れ子のように複数の小領域を設け、適切な広さや人口ごとに管理を行っていくことになります。やはり管理上、小領域間の移動にもルールが作られていくことになります。このように、人は社会を管理するために、その分布域を様々な領域で区切り、ほかと区別して、その領域を無視した行動に規制を加えてきたのです。

例えば江戸時代、藩士が勝手に所属藩の領域を離れたら「脱藩者」として厳しく罰せられました。現代でも正当な手続きを経ずに国境を越えたら「不法出入国」です。この原稿を書いている二〇二一年は、前年から始まった新型コロナウイルスの蔓延が収束していません。感染拡大予防の観点から、緊急事態宣言の発出された地域を中心に「県境を越えるな」と呼びかけられています。このことを背景に、県外ナンバーの車を煽ったり、傷つけたりといった行為が見られたというニュースもありました。

では、この国や県、あるいは学区と呼ばれる社会的な領域は、どのように線引きされているのでしょうか。国家は民族ごとのおよその分布が下敷きになっている場合もあります。また、河川や海、山の稜線といった自然の障壁に基づいている例も多いでしょう（**自然的国境**）。県や学区も、そのベースとなっている律令国や大字などを見れば、大抵は自然の障壁が境をなしています。こうした例では、そもそも領域を越えての人の出入りはさ

ほど頻繁とはいえませんから、ある程度の合理性はあると言えるかもしれません。

しかし、アフリカなどに見られる植民地の名残の直線的な国境（**人為的国境**）、かつてドイツに存在した「**ベルリンの壁**」や南北朝鮮の境界（**軍事境界線**）といった例では、あまり合理的な線引きとは思えません。なぜなら、線引き前、人はその間を自由に往来していたはずだからです。日本の学区でも、児童数を適正にするという考えのもと、同一生活圏をなす団地が真っ二つという事例もあります。

人は、社会的ルールに従うことで、その地位と安全を確保している側面があります。実際に、領域に縛られ管理されていることで、私たちは行政サービスなどをもれなく受けられているともいえます。ですから、多少不合理でも、領域に関わるルールには従うべしと割り切る必要もあります。しかし、戦争によって突如生まれた国境が地域を分断し、親族に会えなくなってしまった人は、だからといって納得しなくてはいけないのでしょうか。県境付近に住んでいる人が、コロナ禍の中、感染対策のしっかりしたすぐ近くの隣県のスーパーに買い物に行き、車に悪戯されても「私が悪かった」と反省しなくてはいけないのでしょうか。領域があることでもたらされる不幸や不便は、少しでも減らすに越したことはありません。

一つの解決方法として、領域の境界を時節に応じて丁寧に見直していくという方法があります。領域に基づく不便を解消した例として、こんなケースがあります。平成の大合併